

《 論 説 》

2 世紀ローマ帝国の東方支配

桑 山 由 文

論文内容の要旨

後2世紀におけるローマ帝国の東方への拡大は、従来、トラヤヌス帝以来の3度のパルティア戦争を中心に考察されてきた。本稿は、その狭間で、防衛に徹し対外平和を維持したとして軽視されてきたハドリアヌス帝とアントニヌス・ピウス帝の治世に着目した。帝国領自体は拡大しなかったが、この時代にこそローマ帝国は東方諸国に対する統制を強めていき、対外的権威が著しく増大したのである。とりわけ、黒海からアルメニアにかけての地域への支配はアントニヌス・ピウス帝の下で確立し、マルクス・アウレリウス帝のパルティア戦争はこの延長線上で理解すべきものであった。さらに、この体制を基盤として、セプティミウス・セウェルス帝以後、ローマがメソポタミアへ直接支配を拡大していくこともまた可能となったのである。

は じ め に

後2世紀初頭のトラヤヌス帝は、ダキア戦争やパルティア戦争など積極的に対外遠征を行った皇帝として知られている。とりわけその治世末のパルティア戦争によって、ローマは一時メソポタミアへ支配の手を伸ばした。ローマ帝国の版図が最大に達した、といわれることもある。

しかし、古くは、元首政期ローマ帝国の時代とは「ローマの平和」の時代であり、その対外政策は基本的には辺境防衛システムの構築を目的としており、外敵から帝国を守ることに重点が置かれていた、と考えられてきた。そのため、この範疇に入らないトラヤヌス帝の積極策は、彼個人の軍事的野心に由来するものとされ、ローマ帝国の対外政策における例外的事例にすぎない、とされる傾向にあった。彼の後を継いだハドリアヌス帝は、トラヤヌス帝がユーフラテス川以東に設立した属州を放棄し、この地からローマ軍を撤退させた。そのため、ハドリアヌス帝はトラヤヌス帝の政策を180度転換し、彼以降、ローマ帝国は本来の対外政策の原則に戻った、と考えられてきたのである¹⁾。

ところが、こうした理解は、1990年代初頭、B. Isaacの大著によって転換を余儀なくされた²⁾。彼によれば、辺境に配備されたローマ軍団は、防衛ではなく攻撃を目的として配置されたのであり、ローマ帝国は初代アウグストゥス帝以来、一貫して拡大主義的傾向を有し

ていた。とりわけ、パルティアに対してローマは領土的野心を持ち続けた。2世紀にそれは明確化し、トラヤヌス帝のパルティア戦争を嚆矢として、マルクス・アウレリウス帝、セプティミウス・セウェルス帝の時代に3度のパルティア戦争が行われ、属州メソポタミアが設置されるにいたったのだ、というのである。この立場からは、ハドリアヌス帝、アントニヌス・ピウス帝といった対外戦争をほとんど行わなかった皇帝の治世の方が例外なのである。このIsaacの考えはC. R. Whittakerなどによって広く受け入れられ、従来のローマ帝国像は大きく軌道修正された³⁾。

これに対して、最近、S. MatternやG. Woolf、D. S. Potterなど、攻撃、防衛双方の折衷案的立場の見解も強力となってきた⁴⁾。例えば、Potterはローマの対外政策に一貫した性格はないとし、皇帝毎の差異を強調した⁵⁾。トラヤヌス帝やセプティミウス・セウェルス帝のような領土拡大の野心を持つ皇帝と、ハドリアヌス帝やピウス帝のような、対外戦争をほとんど行わなかった皇帝によってローマの対外政策も大きく変動するのだ、というのである。確かに、皇帝の治世の個人差を強調することは、ローマ皇帝たちの政策的連続性を低く見積もるF. G. B. Millarらのローマ皇帝研究を踏まえた上での議論であり、大いに説得力がある⁶⁾。だが、こうした見解には、各皇帝の治世に議論を限定してしまい、全体の流れを捉えることができないという欠点がある。また、拡大主義的理解への批判から出てきた立場であるため、防衛的側面を強調するきらいがある。

結局のところ、これら先行研究の立場は押しなべて、ローマ帝国の対外政策を攻撃か防衛か、という2項対立で捉える傾向にある。そのため、攻撃的と彼らが見なすトラヤヌス帝と防衛的と見なすハドリアヌス帝やアントニヌス・ピウス帝との間に連続性を見ることが困難となっているのである。

ハドリアヌス帝が東方への拡大についていかなる政治姿勢を持っていたにせよ、トラヤヌス帝の大戦争を東方で継続する余裕がハドリアヌス帝期ローマ帝国にあった、とは考えにくい。トラヤヌス帝期末から既に東部の広い地域にてユダヤ人反乱が起こっており、帝自身、首都ローマへ帰還の途中に没したのであった。それを継いだハドリアヌス帝は、まずこの問題に対処することで精一杯であった。また、政治的にも、トラヤヌス帝の後継者としての擁立過程に疑惑があり、大きな問題があったことも指摘されている⁷⁾。132年にもユダヤ人反乱は生じた。たとえトラヤヌス帝の東方政策を引き継いだとしても、それを行える状況にはなかった。しかし、このように国内問題が山積していたことをもって、ハドリアヌス帝が対外的に不活発であったと断定することにもまた問題がある。征服戦争が不可能であることと、対外的影響力行使とはまた別次元の問題だからである。

そこで、本稿は、トラヤヌス帝のパルティア戦争以降、周辺諸国がローマ帝国とどのような関係を築いていたのか、彼らにとってローマがどういう存在であったのか、という点をまず考察し、そこから、2世紀ローマ帝国の対外政策の変遷とその特質を明らかにしていく。

第1章 ハドリアヌス帝とユーフラテス川以東

トラヤヌス帝は、114年以降、ユーフラテス川以東に、アルメニア、メソポタミア、アッシリアの3つの属州を創設した、と一般にいわれている。しかし、この3属州がどの程度の実体を有したのかは、きわめて疑わしいといわざるを得ない。トラヤヌス帝期末、ユーフラテス川以東の地域では対ローマ反乱が頻発しており、ローマの支配は、既に崩壊の危機に瀕していたのである。属州設置後すぐに反乱が起こったわけであり、実効的な統治ができていたとは考えにくい。実際、アルメニアを除いて、総督の名も知られていない⁸⁾。

この3属州のうち、まず、属州アッシリアは、後世のエウトロピウスのみが名を挙げるため、実在しなかった可能性すら指摘される⁹⁾。また、たとえ存在したとしても、トラヤヌス帝自身の手で、治世末には属州から転換され、パルタマスパテスを王とするパルティア傀儡政権がつくられた可能性が高い¹⁰⁾。また、属州アルメニアは、3つの中では最も早くにローマ属州になったのであるが、ここは隣の属州カッパドキアと合併されたのであった。しかも、属州整備活動の中心はカッパドキアにあったと考えられており、この地の考古学調査を行った Mitford は、アルメニアは放棄を前提としたかのようにしか扱われていない、と述べているほどである¹¹⁾。やはり、属州として実効的な統治組織が形成された節はない。しかも、トラヤヌス帝は結局、ウォロガエススなる人物にアルメニアの一部を領地として与え、属国として置いているのである¹²⁾。つまり、トラヤヌス帝期末には、アルメニアもアッシリアと同じく属州なのか属国なのか、曖昧な状態であった。この点、属州メソポタミアも同様で、属国オスロエネを包含していたようである¹³⁾。トラヤヌス帝期のユーフラテス川以東の3属州は、ほとんど実体を伴わない、名みの属州だったのである。

したがって、ハドリアヌス帝のこれら3属州の放棄は、トラヤヌス帝の政策と方向性がそれほど違わない、むしろトラヤヌス帝の流れを継承した判断であった。もちろん、ローマ軍を完全に撤退させた、という点では、ハドリアヌス帝はトラヤヌス帝の政策を転換させたといえる。しかし、トラヤヌス帝が治世末につくった「属国」という支配形態は、ハドリアヌス帝によって継承された。それどころか、拡大適用されたようですらある。アルメニアはウォロガエススにそのまま与えられ、南メソポタミア（アッシリア）にトラヤヌスが傀儡政権の王としたパルタマスパテスはオスロエネ王国¹⁴⁾に配置換えされた。さらに、近年新しい碑文が出土し、ペルシア湾河口のメセネ王国（メーシャーン）も、ローマの属国となっていたことが判明した¹⁵⁾。すなわち、トラヤヌス帝征服地のかなりの部分が、ハドリアヌス帝期になってからも、ローマの属国として再編・維持されたのである。加えて、当時、パルティアは内部分裂し、オスロエス王とウォロガエスス3世が相争っていたと考えられている¹⁶⁾。ウォロガエスス3世が勝利を収めた後もミトリダテスという新たな対立王が出現し、統一されなかったようである。

すなわち、ハドリアヌス帝の「撤退」後も、ユーフラテス川以東の地で最も広く影響力を保持したのは、依然としてローマ帝国だったのである。確かに、「撤退」により、属州としてローマが直接統治する地域はユーフラテス川以西に戻った。そこで、先行研究はほぼ例外なく、そのことの意味を過度に強調し、ハドリアヌス帝がユーフラテス川以東の地からローマの痕跡をまったく消し去ったかのように考えてしまう¹⁷⁾。また、属国という支配形式は有効なものではなく、直接支配していないのだからローマの影響力もなかったのだ、と軽視してしまっている。しかしながら、属国という統治形態は、ローマにとって大変馴染みの深い、影響力行使の政治的手法であった。たとえば後1世紀にはユーフラテス川以西に多くのローマ属国が散在しており、近年、それらがローマ帝国内で果たした政治的役割が再評価されてきている¹⁸⁾。ローマ人にとって、属国を介した「支配」は、決して、形だけのもの、名目上のものではなかったのである。Whittakerはハドリアヌス帝が一種の間接統治を狙ったのではないかとしているが、この彼の指摘は正鵠を射ているといえよう¹⁹⁾。

したがって、ハドリアヌス帝の、ユーフラテス川以東からの「撤退」は、文字通りの意味ではなかった。うまく適用することのできない属州という統治形態を諦め、ローマに有利な形で支配地を新たに再編成すること、を意味したのである。ローマは政治的影響力を行使できる状況をユーフラテス川以東の地に残しつつけたことになったのであり、トラヤヌス帝とハドリアヌス帝とで劇的に状況が変化したと考えるべきではない。実際、『ヒストリア・アウグスタ』の「ハドリアヌス伝」中には、ハドリアヌス帝はトラヤヌス帝の秘密の指令で属州を放棄したのだと主張していた、という旨の記述がある²⁰⁾。トラヤヌス帝とハドリアヌス帝との間で、ユーフラテス川以東への政策にそれほど差がないという考えが古代にもあったことの証拠といえよう。また、古代史料の著者たちがハドリアヌス帝の対外政策について問題視するのは、新しく設置した属州の維持を諦め、属国にした点なのであり、ローマの政治的影響力がそれらの地域に及ばなくなったとまで述べているわけでは決していないのである。加えて、ハドリアヌス帝は、トラヤヌス帝が新設した属州の全てを放棄したわけではなく、属州ダキアと属州アラビアは維持した。ユーフラテス川以東の属州を放棄したその1点でもって両帝間の対外政策の連続性を見ないことには問題があるのである。

さて、これら東方の諸属国に対してハドリアヌス帝が行っていた統制の例が、王たちの召集である。

(ハドリアヌスは) 地方政権の支配者と王たちを友好のために招待した。パルティア王オスロエス²¹⁾すら招待され、捕らえていたその娘を返還し、同様に奪われていた玉座の返還も約束した。実際、彼のところへ王たちがやってくると、来ることを望まなかった人々を後悔させるほどに遇した。とりわけ、彼の招待を傲慢にも無視したファラスマネスのために。

(『ヒストリア・アウグスタ』ハドリアヌス伝 13章8-9節)

ハドリアヌス帝がこれら地方政権の支配者や王たちを集めたのは、120年代末の属州カッパドキアのサトラと考えられている²²⁾。地方政権の支配者 (toparches) とは黒海南東岸からアルメニアにかけての地域に住む諸部族の長を指し、「王たち」とは、パルティア王への言及があるところから、アルメニア、メセネ、オスロエネなどの属国王を指していると見て良いであろう。ローマの宗主権を認める地域が、黒海からペルシア湾に到る広範なものであったことが分かる。彼らを集めた目的は、友好 *amicitia* のため、とされてはいるが、ローマ領内の、しかも軍団駐屯地に集められた、ということを見ると、これが単なる友好の集まりであったとは考えにくく、明らかに立場には上下差があり、対等のものではない。彼らを召集することで、ハドリアヌス帝の権威を世に知らしめるための場だったのだといえる。少なくとも1世紀のフラウィウス朝までは、ユーフラテス川以東の広範な地域にわたる諸勢力がローマの属国であったことはなく、もちろん、ローマ国内に集められることもなかった。ハドリアヌス帝期ローマ帝国は、明らかにそれ以前のどの時代よりも周辺への政治的影響力を拡大させていたのである。フラウィウス朝期以前の状態に戻した、という先行研究の見解にはこの点でも従うことはできない²³⁾。もっとも、パルティアについては、「オスロエスすら」という言及の仕方から見て、ローマへの従属がどれほどであったのかは疑問であるが、少なくとも1世紀のようにローマと対等に渡り合える状況にはなかったとはいえよう。

さらに、『ヒストリア・アウグスタ』は、別の箇所でも遠方バクトリアからもハドリアヌス帝のところへ使節がやって来たことを伝えている²⁴⁾。「バクトリア」とはおそらくは当時北西インドを治めていたクシャン朝を指すのだろうと推定されている²⁵⁾。もし、ユーフラテス川以東からのハドリアヌス帝の撤退が軍事的敗北でしかなかったなら、このような遠方からの使節がハドリアヌス帝の下を訪れるとは考えにくい。ハドリアヌス帝期ローマ帝国の威光が以前の時代よりも広く知られていたからこそ、このような地から使節が来たのだといえよう。

これまでの議論をひとまずまとめると、次のようになる。ハドリアヌス帝は、トラヤヌス帝が新たに支配下に入れた地域の多くを、属州という形は廃止したものの、ローマの宗主権下にある属国群として再編したのである。軍を撤退させ、先行研究の言う「国境防衛」に切り替えた後も、ユーフラテス川以東の地域をローマは間接支配しつづけた。ハドリアヌス帝の「撤退」は、政治的影響力の後退まで意味したわけではなかった。むしろ、属州による直接支配を諦めたことで、かえってローマの威信は残り、広く存続しえたのである。

このように、ハドリアヌス帝の對外政策を防衛と一括りにしてしまうことやトラヤヌス帝からの大転換と考えることはできない。周辺勢力へ行使した影響力という点では、トラヤヌス帝期からの連続性・継続性が看取されるのである。トラヤヌス帝のパルティア戦争によって始まったユーフラテス川以東への干渉は引き続き行われ、ある意味、ローマにとってより成功したものへと展開した。実際、古代の史料において、ハドリアヌス帝は軍を撤退させたことについては批判される一方、ローマの軍事力の維持にかなりの配慮をしたとして賞賛さ

れてもいる。古代史料の間の一見矛盾した記述は、帝の対外政策が有したこうした性格の証拠といえる²⁶⁾。

それでは属国を通じてのこの東方支配体制は、実際にはどのように機能していたのか。ハドリアヌス帝期以降のローマ帝国の東方における活動は、トラヤヌス帝の旧征服地とローマとの関係だけでなく、その周辺をも含めたより広い視点から見ていく必要がある。そこで、次に、後2世紀におけるローマと東方の周辺王国との具体的関係を考察する。

第2章 ハドリアヌス帝とコーカサス地方 —— ローマ支配の拡大 ——

1

トラヤヌス帝のパルティア戦争で影響を受けたのは、メソポタミア地方だけではない。アルメニアより北に位置する、黒海南東岸やコーカサス地方もこの戦争に大きく関与したのである。そして、ハドリアヌス帝期ローマ帝国の東方支配がもっとも激しい軋轢を生じていたのもこれらの地域であった。

パルティア戦争の最初期、トラヤヌス帝はこの地域の諸王と同盟を結んだ上で、アルメニアへの侵攻を開始した。たとえば、黒海東岸のコルキス地方に住むヘニオキ人とマケロネス族の王安キアルスがローマ軍に合流した²⁷⁾。また、碑文より、コーカサス地方の主要国の一つイベリア王国の王族アマザスプスがメソポタミアを攻めるローマ軍に加わっていたことも分かっている²⁸⁾。イベリア王国は伝統的にパルティアと対立することが多く、トラヤヌス帝にとって強力な同盟者であったといえる。

ところが、ハドリアヌス帝期になると、ローマ＝イベリア関係に変化が生じた。前に引用した『ヒストリア・アウグスタ』「ハドリアヌス伝」13章8-9節によれば、イベリア王ファルスマネスはサタラへの諸王の召集を拒否したのであった。しかも、その後、ハドリアヌス帝期末には両者の関係はますます悪化していたようである。ファルスマネスは、コーカサス山脈北方から黒海北方にかけての遊牧民アラニ人と手を結んだ。歴史家ディオ・カッシウスが伝えるところでは、アラニ人は135年頃にコーカサス地方を越えて南下、まずイベリアの東に位置するアルバニアやメディアに被害を与えた。次いでアルメニアとカッパドキアを襲った時、前者ではウォログエス王が贈り物を送って説得し、後者では総督フラウィウス・アッリアヌスが恐怖を与えたため、アラニ人は故郷へと退却していった²⁹⁾。アラニ人を扇動してこのような侵略行為を行うよう仕向けたのがファルスマネスであった³⁰⁾。

このように陰悪であった両国関係は、次のピウス帝期初頭には友好的なものに転じた。141年頃、ファルスマネスは一族を連れてローマを訪れ、アントニヌス・ピウス帝によって歓待されたのである³¹⁾。先行研究は、ハドリアヌス帝期におけるローマ＝イベリア関係の悪化、その後の回復を十分に説明できてはいない。概して、ハドリアヌスとファルスマネスの対立を一時的な軽いものであり、すぐに和解したと見なす傾向にある³²⁾。A. Silberman は、

『ヒストリア・アウグスタ』が両者の対立を誇張して描いているのだと考える³³⁾。だが、イベリアは、アラニ人の侵略というローマにとって重大な脅威を引き起こしたのである。『ヒストリア・アウグスタ』だけでなくディオ・カッシウスも、アラニ人の南下を、ローマに被害の大きかった第2次ユダヤ人反乱と並べて扱い、別の戦争が始まった、と述べている。それを引き起こしたイベリアとローマの対立が軽いものであったと見なすべきではない³⁴⁾。『ヒストリア・アウグスタ』の誇張というだけでは片付けられないのである。M. Sartre は両国関係がそもそも変化せずハドリアヌス帝期、ピウス帝期を通じて友好的であったとまで言うが、彼の論の根拠はピウス帝に対してファルスマネスが友好的であったということだけであり、結果論にすぎない³⁵⁾。

一方で、P. A. Stadter は、アラニ人とイベリアの連携が、ローマ＝イベリア関係を大変緊張させたことは認めるが、しかし、ハドリアヌス帝期のうちに和解したとする³⁶⁾。Stadter の論拠は、ハドリアヌス帝とファルスマネスが互いに贈り物を送りあう関係であったとする『ヒストリア・アウグスタ』18章、21章の記述である。だが、『ヒストリア・アウグスタ』は、両者が贈り物を交換しつつも互いを軽蔑していたと補足しているのである。この点により注意を払わねばならないと筆者は考える³⁷⁾。ローマとイベリアはハドリアヌス帝期を通して、外交関係を維持し決定的衝突は避けつつも、一貫して不和であったと考えるべきであろう。この点、イベリアとアラニ人の連携の意義を強調すると同時に、イベリアが理論的にはローマへ従属していたことを指摘もする B. Rémy の考えが最も納得できる³⁸⁾。

両国関係が悪化した要因に触れる数少ない研究者である A. B. Bosworth は、ファルスマネスの個人的野心を指摘する。彼の考えはピウス帝期に両国関係が好転したことを説明できず、また安易に個人的野心に還元してしまうことには問題がある³⁹⁾。しかし、イベリア側が対立を主導していたとする彼の分析には説得力がある。ファルスマネスがハドリアヌス帝の招集を拒否したこと、アラニ人の南下を扇動したこと、という2つの事実から考えると、ローマよりもイベリアの方が相手に対して反発を強めていた、と推測されるからである。

2

なぜイベリアはローマと距離を置こうとしたのか。第一に、当時の世界におけるイベリア王国の位置づけを考慮に入れねばならない。実はイベリアはローマの宗主権を完全に認めていたわけではなかった。だが、先行諸研究は、この王国が元首政期を通じてローマに全く従属していたと単純に考えてきた⁴⁰⁾。イベリアは1世紀のアルメニア戦争でローマと共に戦い、また、パルティア戦争でトラヤヌス帝の遠征軍の一員であったことなどから、ローマの支配拡大に反発するはずはないとの先入観があったのである。しかし、1世紀のイベリアがローマと同盟を組むことが多かったのは、反パルティアの立場からにすぎない。イベリアにはアルメニアへの領土的野心が常にあり、1世紀の間はパルティアがアルメニアに対して最も影

響力を持っていたのである。クラウディウス帝期にアルメニアをローマが支配下に置いた時にはイベリアはローマにも敵対し、親ローマの王を追放させることに成功した⁴¹⁾。言いかえれば、1世紀のアルメニア問題は、ローマとパルティアだけでなく、第三勢力イベリアをも含んだ三つ巴の争いだったのであり、イベリアはローマの利害に沿ってのみ行動していたわけではないのである。この状況は当然、2世紀になってもそれほど変化してはいなかったであろう。

第二に、イベリアと隣接する、黒海東岸コルキス地方をめぐる状況があった。ハドリアヌス帝期にはこの地方はカッパドキア総督の管轄下にあった。ハドリアヌス帝は、属州カッパドキアの北東端、トラペズスの付近まで自ら赴くほど、この属州に並々ならぬ関心を注いでいた。実際、この地域における道路網建設発展の第3期はハドリアヌス帝期であったことをS. Mitchell は指摘している⁴²⁾。前述のように、ハドリアヌス帝が属国王を招集したサトラもこの属州にあった。総督にもブルッティウス・プラエセンスやフラウィウス・アッリアヌスなど腹心を任命した。特に、アッリアヌスは131年から137年まで、6年あまりという異例の長期にわたって在職したのである。その著作『黒海周遊記』は黒海沿岸の様子、コルキス地方や黒海北方ボスボルス王国について記すもので、彼自ら巡察旅行で見聞した情報も含まれており、この地方についての一級の史料となっている⁴³⁾。この『周遊記』からは、コルキス地方におけるローマの支配がトラヤヌス帝期からハドリアヌス帝期にかけて、徐々に強化されていったことが見て取れる。11章において、アッリアヌスは、コルキス地方の諸部族とその支配者について描写しているが、トラヤヌス帝期にローマの支配下に入った部族としてアプシライ人だけを挙げている一方、ハドリアヌス帝期にローマの支配下に入った部族として、ラジ、アバスコイ、スパタガスの3つを列挙しているのである⁴⁴⁾。トラヤヌス帝期ではなく、ハドリアヌス帝期になってから、急速にコルキス地方におけるローマの支配が広がっていったことが伺えるのである⁴⁵⁾。

これは、トラヤヌス帝期までの状況とは全く異なっていた。イベリアにとって、パルティアとは領土が近く対立することが多かった一方、ローマは1世紀末頃ようやく黒海南東岸へ本格的に進出してきたのであり、もともとは直接利害がぶつからない存在であった。フラウィウス朝期に記された大プリニウスの博物誌においては、コーカサス地方でローマ支配下にいる部族の存在は知られていない。たしかに、イベリアの首都でローマが城壁建設を援助したことや、アルバニアに百人隊長が派遣されたことを示す碑文は出土しており、接触があったこと自体は明らかである。だが、フラウィウス朝30年の間にイベリア、アルバニアそれぞれ碑文1枚のみの出土であり、大規模な交流ではなかった⁴⁶⁾。

以上の2つの状況を考慮すると、ローマ帝国とイベリア王国との対立の背景が明確となる。第一に、ハドリアヌス帝以降、ローマの支配が従来の国境を越えて東方諸国へ広く及び、とりわけアルメニアがローマに強く従属したため、イベリアはアルメニア方面への領土的野心を阻まれてしまった⁴⁷⁾。しかも、イベリアはトラヤヌス帝のパルティア戦争でローマに味方

したにもかかわらず、何の恩恵も受けていなかったようである⁴⁸⁾。これもローマへの敵対心を助長したであろう。第二に、いっそうファルスマネスを刺激したであろうことに、ハドリアヌス帝期になってから、パルティア戦争の帰趨とは直接関係のないコルキス地方においてもローマの影響力は増大していった。当時ファルスマネスの勢力もまたコルキスに及んでいたことが知られるが、支配下に置いていたのは一部族だけであった⁴⁹⁾。ここでもイベリアは勢力拡大を阻まれているのである。イベリアを取り巻くこの閉塞した状況こそが、アラニ人の南下を扇動させることになったのであろう。ローマ帝国の政治的影響力がアルメニアとコルキスの両地方において拡大したことが、本来は友好的であったイベリア王国との権益の衝突を産んでいたのである。ハドリアヌス帝期ローマ帝国の東方支配は、この地域でこそ、アラニ人の南下において頂点に達する、激しい摩擦を生じていたのであった。

このようなコーカサス地方をめぐる情勢は、アントニヌス・ピウス帝期には大きく変化する。前述したように、ファルスマネスがローマを来訪したのである。しかし、これは単なる両国の友好関係の修復を意味するものではなかった。この事態こそが、以後のローマ帝国東方支配の根幹を決す画期であった。次章ではこの点を見ていく。

第3章 アントニヌス・ピウス帝の東方政策とファルスマネス

1

ピウス帝期における最大の対外問題はアルメニアをめぐるものであった。ピウス帝即位直後の139年、アルメニア王が死亡し、ピウス帝が新たに王を任命したことが「*Rex armeniis datus*」(アルメニア人に与えられた王)の銘を持つ貨幣より知られている⁵⁰⁾。『ヒストリア・アウグスタ』『アントニヌス・ピウス伝』9章6節によると、このときパルティアがアルメニアを攻撃しようとしたが、ピウス帝はパルティア王に書簡を送って介入を止めさせた⁵¹⁾。

ピウス帝は、ハドリアヌス帝と同じく、周辺諸国に対して攻撃的でない皇帝であったとしばしば見なされてきたのであるが、この事例は、実態がかなり異なっていたことを示す良い証拠である⁵²⁾。というのも、同じ頃、シリアのサモサタにいたL. ネラティウス・プロクルスがパルティアとの戦争のために軍団分遣隊を率いて移動させたことが、碑文より分かっているのである⁵³⁾。つまり、ピウス帝は、戦争を準備して威嚇することで、もしくは実際に小競り合いぐらいは起こして、パルティアのアルメニア攻撃を阻止したのである。加えて、ピウス帝発行の貨幣の銘から、ピウス帝期ローマ帝国がパルティアを属国視していたことが分かっている。現実の状況はともかくとして、少なくともローマ帝国の公式見解ではパルティアはあくまでも属国の一つとして扱われているのである⁵⁴⁾。

こうした強硬な対外姿勢は、パルティア以外にも向けられた。上記のエピソードに続く、『ヒストリア・アウグスタ』9章6節から10節にかけては、ピウス帝の対外干渉の様々な例を描いている⁵⁵⁾。それによれば、ピウス帝は、黒海南東岸のラジ人には新たに王を任命し、

オスロエネ王国のアブガルス王に対しては自らの権威を示すだけで、「東の地域から」(ex orientis partibus) 撤退させた⁵⁶⁾。また、黒海北岸ポントゥス王国の王位継承争いにも介入し、黒海北西岸のオルビオポリスには援軍を派遣して、ここを攻めていたタウロスキュティア人を打ち破った。ピウス帝がこれらの地域の情勢に強い関心を示し、ローマの政治的意志を強制していたことが分かる。そして、以上の記事を伝えた後、『ヒストリア・アウグスタ』は最後に「実際、外民族に対してこれほどまでに大きな権威を持った人物はいなかった」とまで記しているのである。こうした一連の記述からは、帝国防衛に専心する平和的な皇帝というピウス像を見ることはさわめて困難である。

このように、ハドリアヌス帝期ローマ帝国の東方支配体制はピウス帝期においても継承されたのであり、それに基づいた強力な干渉をピウス帝は行ったのであった。しかも、アウレリウス・ウィクトルの史書によると、ピウス帝の下にはバクトリアだけでなくインド、ヒュルカニアからの使節も来訪したのであった。この記述を額面通り受けとるならば、ハドリアヌス帝期よりさらにローマ帝国の威光が広がっていたことになる⁵⁷⁾。

さらに注目すべきことに、この『ヒストリア・アウグスタ』9章6-10節で記されている、ピウス帝が政治介入した地域は全てローマ帝国東方辺境のうちのどこかであり、とりわけ黒海周辺の事例が多い。ハドリアヌス帝期と同様、この地域がローマ帝国東方政策の焦点であったことが分かる。

2

ファルスマネスのローマ来訪を伝える『ヒストリア・アウグスタ』の記事は、実は、この9章6節の冒頭を飾っているのである。それゆえ、ファルスマネスのローマ来訪は、6-10節にかけて描写されている、ピウス帝の強硬な対外姿勢の一環であった、と考えねばならない。単なる友好の回復ではなかったのである。また、少なくとも『ヒストリア・アウグスタ』の著者にとっては第一に挙げねばならない重要な事態であった。フロントも言及しており、当時の首都ローマでも記憶に残る事件だったらしい⁵⁸⁾。

注目すべきことに、ディオ・カッシウスによると、ファルスマネスはローマ来訪時、カピトリウム神殿にて犠牲を捧げている⁵⁹⁾。Braundによれば、カピトリウム神殿で犠牲式を行う権利は、ローマの属国王に許されたものである⁶⁰⁾。また、ローマでの他国の王の歓迎行事は大変珍しい。ローマの宗主権を認めたアルメニア王ティリダテスが、66年イタリアを訪れてネロ帝により王冠を授けられた例を思い起こさせる⁶¹⁾。したがって、ファルスマネスの来訪は、イベリアが名目上のローマ属国ではなくなり、より実質的にローマの宗主権を認め、支配下に入ることを意味したのである。ハドリアヌス帝期にはサタラへの召集を拒否したファルスマネスが、この時にはローマへの呼び出しに応えたことは、まさに、周辺勢力に対するピウス帝の強大な権威を象徴する出来事であった⁶²⁾。

もっとも、ピウス帝は一定の見返りを与え、いわば「アメとムチ」でイベリアを勢力下に

収めたようである。同じくディオによると、ファラスマネスは、ローマにて、自身の騎馬像建立という名誉を受けてもいる。ローマ人ではなく、他国の王がこうした名誉を受けた前例は知られていない。かなりの厚遇であり、イベリア王国の力をピウス帝がかなり認めていたことの証左でもある。さらに重要なことに、同時にファラスマネスは領土の加増を受けているのである。彼に与えられた領土がどこかははっきりしないが、イベリアはローマとは直接領土を接してはいないため、周辺属国の領土を割譲されたとしか考えられない。先行研究の意見はコルクスカアルメニアかで分かれているが、コルクスは小部族ばかりでありイベリアからの交通の便も良くないので、イベリアが長年関心を払っていたアルメニアの一部を割譲したと考える Braund 説にもっとも説得力があろう⁶³⁾。いずれを獲得したにせよ、イベリアは、ハドリアヌス帝期の閉塞状況をある程度改善することに成功したのである。ここには強硬一辺倒ではない、ピウス帝の卓越した政治手腕が見て取れよう。

こうして、ピウス帝は、ローマから離反しつつあったイベリアを取り込むことに成功し、コーカサス地方における支配をコルクス地方からさらに東へと浸透させたのであった。このことは、ローマにとって、単なる支配の拡大以上の価値があった。後背地であるイベリアを確保することで、ローマはアルメニア周辺の支配を一層円滑に安定したものとすることが可能となった。1 世紀から続いていたアルメニアをめぐる三つ巴の抗争はここにローマの圧倒的有利で終息したのである。その意味で、ファラスマネスのローマ来訪は、ローマ東方関係の大きな転機であった。

こうしたピウス帝の東方支配は、以後の時代の東方政策に大きな影響を与えることとなった。その一つが、マルクス帝期のパルティア戦争での圧倒的勝利である。ピウス帝期以降、パルティアの勢力が回復し、前述のアルメニア攻撃の企てに始まり、150 年頃になると、南メソポタミアのメセネ王国を勢力下に置くことに成功したようである⁶⁴⁾。この流れは、マルクス帝期初頭にパルティア戦争へと発展した。パルティアはアルメニアにてカッパドキア総督を敗死させ、親ローマの王を追放して親パルティアの王をつけることに成功した。ローマに従属していたオスロエネ王国でも親パルティアの王が立った。パルティアは一時的にユーフラテス以東の地を席捲し、属州シリアさえも狙ったのである⁶⁵⁾。しかし、マルクス帝の共治帝ルキウス・ウェルスが率いる遠征軍によって、アルメニアは直ちに奪還されて再び親ローマの王が立った。そればかりか、ローマ軍はパルティアの首都クテシフォンにまで侵攻し、大打撃を与えたのであった。

このようにローマが容易にアルメニアを奪還し、メソポタミア深奥にまで侵攻することができた背景には、後背地であるコーカサス地方の確保が大きな意味を持っていたのである⁶⁶⁾。以後、ユーフラテス川以東において、ローマはパルティアに対して圧倒的優位に立っていくことになる。実際、マルクス帝のパルティア戦争を経て、ローマのアルメニア支配はさらに安定した⁶⁷⁾。この戦争で擁立されたアルメニア王ソハエムスは、171 年には一時追放されたらしいが、カッパドキア総督マルティウス・ウェルスの干渉で直ちに復位した⁶⁸⁾。また、碑

文からは、この頃にはローマ軍がアルメニアに駐屯し⁶⁹⁾、その後、コンモドゥス帝期においても駐屯が継続していたことが分かっている⁷⁰⁾。

このことは、結果的に、メソポタミアへ侵略することができる体制ができあがったことをも意味した。2世紀における東方での勢力基盤形成の結果が、セウエルス帝のパルティア戦争と、それに伴うメソポタミア地方における属州創設につながっていくのである。領土拡大はほとんど伴わなかったアントニヌス・ピウス帝期こそが、後の東方拡大への画期だったのである。

お わ り に

トラヤヌス帝のパルティア戦争はそれ自体としては失敗に終わったものの、それを契機として、ハドリアヌス帝期以後のローマ帝国は、東方諸国に対して強い政治的影響力を行使することとなった。しかし、元首政期におけるローマ帝国とその東方諸勢力との関係を扱ってきたこれまでの研究は、トラヤヌス、ウェルス、セウエルスの3皇帝のパルティア戦争、もしくは、ユーフラテス川以東のローマ属州化の如何に関心が集中する傾向にあった。その間のハドリアヌス帝期、ピウス帝期については、ローマ帝国は対外拡大に無関心か不活発であったと考えられ、軽視されてきたのである⁷¹⁾。だが、実は、属州設立や大規模戦争のような軍事力行使というよりもむしろ、外交的側面の方が2世紀には大きな意味を持っていた。そのような視点から2世紀ローマ帝国の東方支配のありかたを眺めた本稿の議論は、一つの像を浮かび上がらせた。ハドリアヌス帝期からマルクス・アウレリウス帝期にかけて、ローマ帝国は、それ自体の領土の拡大は伴わなかったにもかかわらず、東方に対して広範な影響力を獲得、強化していったのであった。いわば、2世紀はローマ帝国にとって、東方での「権威」の確立の時代であった。この時代にくそ、ユーフラテス川を境界線とする、それまでのパワーバランスが崩壊していき、ローマのパルティアへの優位が決定づけられたのである。

さらに、本稿の考察からは、パルティアそのものに対するローマ帝国の領土的野心を伺うことはほとんどできなかった。ハドリアヌス帝、アントニヌス・ピウス帝の関心はもっぱらアルメニアやコーカサス地方へと向けられていたのである。もちろん、メソポタミア属州化はまったく眼中になかったのである。その意味では、トラヤヌス帝は例外であった。1世紀のローマ帝国がパルティアに対して抱いていた苦手意識がしばしば指摘されるが、B. Campbell や Mattern のようにトラヤヌス帝のパルティア戦争だけでそれが払拭されたというのは単純すぎる理解といえよう⁷²⁾。東方におけるローマの活動がすべてメソポタミア地方獲得を最終的に目的としていたとアブリオリに考えるべきではない。

マルクス帝のパルティア戦争もこの流れにあった。この戦争でローマはメソポタミア地方深奥にまで攻め込んだにもかかわらず、トラヤヌス帝のような属州化を試みなかった。この

ことについて従来は、なぜ属州化「できなかった」もしくは「しなかった」のかが問題とされてきた。だが、こうした議論自体が、東方諸国に対するマルクス帝の政治姿勢を、トラヤヌス帝、セウェルス帝のそれと同じであったと見なす前提から生じた、的外れなものである⁷³⁾。属国への統制を通じてのローマ帝国の「権威」浸透という、ハドリアヌス帝以来の東方支配の方策をマルクス帝は継承したと考える方が自然である。むしろ、セプティミウス・セウェルス帝こそが、東方地域を属州化する、という新機軸を打ち出したのであった⁷⁴⁾。以後、ローマ帝国はメソポタミア地方への領土拡大へ再び目を向けていくのである。筆者はこのような展望を抱いているが、マルクス帝期、セウェルス帝期についてより詳細な検討が必要であろう。今後の課題としたい。

註

- 1) たとえば G. Kerler, *Die Aussenpolitik in der Historia Augusta*, Bonn, 1970, 27; T. B. Mitford, Cappadocia and Armenia Minor: Historical Setting of the *Limes*, *ANRW*, II. 7. 2, 1980, 1169–1228. また、近年の研究でも J. Wolski, *L'Empire des Arsacides*, 1993 はこの立場に立つ。
- 2) B. Isaac, *The Limits of Empire*, Oxford, revised ed., 1992.
- 3) C. R. Whittaker, *Frontiers of the Roman Empire*, Baltimore and London, 1994. (以下, Whittaker, FRE と略す)
Isaac 説については、倉橋良伸「後期ローマ帝国とササン朝ペルシア」(倉橋良伸・栗田伸子・田村 孝・米山宏史『躍動する古代ローマ世界』理想社、2002 年) 所収、291–298 頁に詳細に述べられている。
- 4) S. Mattern, *Rome and the Enemy*, Berkeley, 1999, 108–110 は Isaac の侵略的帝国主義の単純性を指摘する。桑山由文「書評 S. Mattern, *Rome and the Enemy: Imperial Strategy in the Principate*」(『西洋古代史研究』3, 2002, 47–52 頁) 参照。G. Woolf, *Roman Peace*, J. Rich & Shipley, G. (ed.), *War and Society in the Roman World*, 1993, 171–194.
- 5) D. S. Potter, *Emperors, their borders and their neighbours: the scope of imperial mandata*, D. L. Kennedy (ed.), *The Roman Army in the East*, Michigan, 1996, 49–66; B. Campbell, *Rome and Parthia*, J. Rich & Shipley, G. (ed.), *War and Society in the Roman World*, 1993, 213–240 など。
- 6) F. G. B. Millar, *The Emperor in the Roman World*, London, 1977.
- 7) 南川高志『ローマ皇帝とその時代』創文社、1995 年、185–235 頁。
- 8) アルメニア総督は L. カティリウス・セウェルスであった。
- 9) Eutropius, 8, 3, 2.
- 10) C. S. Lightfoot, *Trajan's Parthian War and the Fourth-Century Perspective*, *JRS*, 80, 1990, 115–126; D. S. Potter, *The Inscriptions on the Bronze Heracles from Mesene*, *ZPE*, 88, 1991, 281–282.
- 11) Mitford, op. cit., 1199–1200.
- 12) Dio Cassius, 68, 30, 6.
- 13) Dio Cassius, 68, 21. S. K. Ross, *Roman Edessa*, London & New York, 2001, 34–35. なお、ローマが118年まで直接統治し、その後属国となったとするものに、J. Wagner, *Provincia Osrohoenae, Armies and Frontiers in Roman and Byzantine Anatolia*, B. A. R. 156, 1983, 103–130.
- 14) マンヌス 8 世が 163 年まで支配し、一時的に 163–165 年の間はパルティア系の支配者が立ったようであるが、ルキウス・セウェルス帝のパルティア戦争の結果、マンヌス 8 世が復位したようで

ある。Wagner, op. cit., 105.

- 15) Potter, op. cit., 277-90; F. A. Pennacchietti, L'iscrizione bilingue Greco-Partica dell'Eracle di Seleucia, *Mesopotamia*, 22, 1987, 169-185; G. W. Bowersock, La Mésène (Maishan) Antonine, T. Fahd, (ed.), *L'Arabie préislamique et son environnement historique et culturel*, Strasbourg, 1989, 159-168.
- 16) M-L. Chaumont, L'Arménie entre Rome et l'Iran, *ANRW*, II, 9-1, 1976, 144; A. D. H. Biver, The Political History of Iran under the Arsacids, E. Yarshater (ed.) *the Cambridge History of Iran*, vol. 3 (1), Cambridge, 1983, 93
- 17) たとえば, Wagner, op. cit., 105; M. T. Schmitt, *Die römische Außenpolitik des 2. Jahrhunderts n. Chr.*, Stuttgart, 1997, 63. また, M. Sartre, Syria and Arabia, *CAX*, XI, 2nd ed., Cambridge, 2000, 640-641 は, 2世紀におけるユーフラテス川東部の従属王国の存在について指摘するが, メセネなど個別の説明に留まり, 全体像を描いてはいない。
- 18) D. Braund, Client Kings, D. Braund, (ed.) *The Administration of the Roman Empire (241 BC-AD193)*, Exeter, 1988, 69-96.
- 19) Whittaker, *FRE*, 57; Id., *Frontiers, CAH*, XI, 2nd ed., 2000, Cambridge, 310 (以下, Whittaker, *Frontiers* と略す)。もっとも, 彼は本稿のように, ハドリアヌス帝期からマルクス・アウレリウス帝期までの状況を体系的に論じているわけではない。とくに, ビウス帝期をまったく省略している。
- 20) HA, Hadrianus, 9, 2. Potter や J. Teixidor は, この『ヒストリア・アウグスタ』の記述の信頼性が高いと考える。J. Teixidor, Parthian Officials in Lower Mesopotamia, *Mesopotamia*, 22, 1987, 187-193; Potter, op. cit., 281.
- 21) 原文では Osdroes。
- 22) Ex. A. B. Bosworth, Arrian and Alani, *HSCP*, 81, 1977, 228; D. Magie, *Roman Rule in Asia Minor*, 2 vols., Princeton, 1950, 621. なお, A. R. Birley, *Hadrian the Restless Emperor*, London & New York, 2000, 225 はシリアのサモサタの可能性も指摘する。だが, サタラと同じく軍団駐屯地であり基本的性格は変わらない。
- 23) ハドリアヌス帝がフラウィウス朝期の状態に戻した, との立場には M. Hassal, *The Army, CAH*, XI, 2nd ed., 2000, Cambridge, 340; B. Rémy, *L'Evolution administrative de L'Anatolie aux trois premiers siècles de notre ère*, Lyon, 1986, 73-75.
- 24) HA, Hadrianus, 21, 14.
- 25) J. P. Callu, Gaden, A. and Desbordes, O. (tr.), *Histoire Auguste*, t. I, 1, Paris, 1992, 127.
- 26) たとえば, コルネリウス・フロントはハドリアヌス帝の属州放棄策を批判し, その姿勢は, アウレリウス・ウィクトルやウァレリウス・フェストゥスなど4世紀の史家たちに受け継がれた。一方, 『ヒストリア・アウグスタ』は, ハドリアヌス帝が軍紀向上に努めたとする。ディオによると, ハドリアヌスの軍隊訓練はその後の手本ともなるもので, そのために周辺諸国との間に平和が保たれた, という。この「平和」とは, すなわち, ローマの軍事力を見せつけ, 圧倒した上での「平和」だったのである。これに関して, M. Schuol, *Die Charakene*, Stuttgart, 2000, 347 は, ハドリアヌス帝が各地の反乱や外敵の脅威などにさらされて平和を求めたとするが, 単純な解釈であろう。
- 27) Dio Cassius, 68, 19, 2
- 28) IGR, 1, 192.
- 29) Dio Cassius, 69, 15, 1. この「ウォロガエス」がバルティア王ウォロガエス3世とアルメニア王ウォロガエスのどちらを指すかは議論があるが, アラニ人の侵略がアルメニアに打撃を与えたことなどを考慮すると, 後者とする Chaumont らの考え方が自然であろう。(Chaumont, op. cit., 143-144; Rémy, op. cit., 73; W. Hutt, *Antoninus Pius*, Prag, 1936, 232.) さらにこの記述に続いて, ディオはこの「ウォロガエス」がハドリアヌス帝にファラスマネスを告発したことを記している。1世紀のアルメニア戦争後のようにアルメニアがバルティアと密接な関係にあった時代ならともかく, トラヤヌス帝のバルティア戦争後のアルメニアは, ローマへの従属の

度合いを強めていた一方、パルティアのローマへの従属はそれほど大きなものではなかった。これらを考慮に入れると、アルメニア王が、宗主国ローマに同じローマ従属国イベリアを告発したと見なす方が説得力があろう。

- 30) イベリアはコーカサス山脈の峠をおさえており、その協力なくしてアラニ人の南下は不可能であった。
- 31) Dio Cassius, 69, 15, 3; HA, Antoninus Pius, 9, 6.
- 32) 対立を一時的なもの、もしくはハドリアヌス帝期末には終息し良好なものになっていたと考えるものには、D. Braund, *Hadrian and Pharasmanes*, *Klio*, 73, 1991 (以後、Braund, Pharasmanes と略す), 213–214; A. B. Bosworth, *Arrian and Rome: the minor works*, *ANRW*, 2. 34. 1, 1993 (以後、Bosworth, AR と略す), 230–232.
- 33) A. Silberman, *Arrien, Périple du Pont Euxin*, Paris, 1995, xvi.
- 34) アラニ人の侵略でローマ属州カッパドキアがどれほど被害を受けたかは議論があり、Bosworth などは低く見積もる (A. B. Bosworth, *Arrian and Alani*, *HSCP*, 81, 1977 (以後、Bosworth, AA と略す), 217–255.)。だが、たとえ実際の被害がそれほどのものではなく、また、アラニ人の主たる攻撃目標がメディアやアルメニアであったとしても、ローマ側がアラニ人を脅威と見なしていたこと自体を否定することには無理があろう。また、アラニ人の攻撃はむしろローマ国外の勢力に打撃を与え、ローマに利益であったとする見解もある。だが、本稿がこれまで議論してきたようにアルメニアなど国境外の諸勢力が強くローマの影響下にあった当時、アルメニアへの攻撃はローマの権威に対する重大な挑戦であったと考えるべきである。
- 35) M. Sartre, *L'Asie Mineure et l'Anatolie*, Paris, 1995, 182–183.
- 36) P. A. Stadter, *Arrian of Nicomedia*, Chapel Hill, 1980, 47. なお、ハドリアヌス帝とファラスマネスの対立を Stadter と Bosworth がかなり厳しいものであったと見るのに対して、Braund, Pharasmanes はそれほど大きな対立ではなかったと理解する。なお、Bosworth は、テミスティウスの記述を信頼しフラウィウス・アッリアヌスの役割を評価したが (Themist., 34, 8; Bosworth, AA, 229–230), R. Syme の反論を受けて (R. Syme, *Hadrian and the Vassal Princes*, *Athenaeum*, 59, 1981, 273–83. = *RP*, III, 1440), 新論文では信憑性を低く見積もる (Bosworth, AR, 231)。
- 37) 『ヒストリア・アウグスタ』18 章によれば、ハドリアヌス帝はファラスマネスからの贈り物を軽蔑していた。また、21 章によれば、ハドリアヌス帝はイベリア人とアルバニア人に贈り物を与えて厚く遇したが、一方、イベリア人らはハドリアヌス帝の下を訪れることを軽蔑していた。なお、Braund は、この 21 章の記述がイベリア人とアルバニア人を一括して扱っていることから、ファラスマネスだけでなくアルバニア王も 129 年のサタラへの招待を拒絶したとする。だが、13 章と 21 章が同じ事件を扱っているという保証はない。(Braund, Pharasmanes, 208–219.)
- 38) Rémy, op. cit., 75–76.
- 39) Braund, Pharasmanes, 213 は、『ヒストリア・アウグスタ』の記述が事態を個人間の対立に捉えることを好みがちであることを指摘し、注意を促している。
- 40) 西ヨーロッパのローマ史学界における、ローマ時代のコーカサス地方についての研究史は大変浅く、Bosworth や Braund によって 70 年代末から本格的に始まったばかりである。そうした状況もイベリア王国の役割を過少評価することにつながったのかもしれない。
- 41) 先行研究は、この時のイベリアの反ローマ的態度も充分説明できていない。
- 42) S. Mitchell, *Anatolia*, 2 vols., Oxford, 1993, 124.
- 43) この書の元となったものは、総督として彼がハドリアヌス帝へ宛てた報告書であった。なお、アッリアヌス自身が航海した地域は、トラペズスからディオスクリアスにかけてである。
- 44) Arrianus, *Peripulus*, 11.
- 45) また、この箇所からは、アッリアヌスがローマ帝国の領土拡大について肯定的な態度を取っており、しかも、ハドリアヌス帝に対して書簡でそのことを伝えていることが分かる。この点からもハドリアヌス帝期ローマが、周辺に対する影響力拡大に消極的であったとは考えにくいのである。

- 46) イベリアにおけるローマ帝国の痕跡が確認されるのはフラウィウス朝期に入ってからである。ウェスパシアヌス帝期の75年にイベリアの首都においてローマ軍の分遣隊が城壁建設を補助したことを記す碑文、および、ドミティアヌス帝期にカスピ海沿岸、現在のバクーの北にローマ軍の百人隊長がいたことを示す碑文が発見されている。この二碑文を根拠として、ローマがフラウィウス朝において既にコーカサス地方を軍事占領していたと推定するむきもあるが、碑文数の極端な少なさから、ほとんど支持されていない。詳しくは、拙稿「ウェスパシアヌス帝の東方政策——帝国の再建と最盛への礎——」(『史林』81-6, 1998年, 72-105頁)参照。
- 47) Schmitt, op. cit., 63 は、アルメニアはハドリアヌス帝期に、ローマの宗主権を認めるも親パルティアの王が立つことになった63年の状態にまで戻されることになったと考える。彼の説の根拠は、「ハドリアヌスはアルメニア人が自分たちの王を持つことを許した」という『ヒストリア・アウグスタ』21章11節であるが、この記述はアルメニアが属州から属国へ転換したことを指しているものであり、63年の状態に戻ったとまで解釈することはできない。
- 48) トラヤヌス帝がパルティア戦争の戦後処理をせずに没したことも背景にはあるのかもしれない。
- 49) Arrianus, *Peripulus*, 11.
- 50) RIC, III, 110, no. 619. 死亡したアルメニア王はおそらくウォログエスであった。
- 51) HA, Antoninus Pius, 9, 6-10.
- 52) ローマ帝国東方辺境の時代的変遷を攻撃的帝国主義の側面から概観した Whittaker, FRE, 49-59 がピウス帝期にまったく触れていないことは示唆的である。また、ピウス帝期を平和な時代とする伝統的立場に立つものには, Biver, op. cit., 93. 彼によると、ローマとパルティアの対立はマルクス帝即位とともに始まった。
- 53) ILS, 1076.
- 54) RIC, III, 105, no. 585; Chaumont, op. cit., 146.
- 55) なお、9章前半の1-5節は、ピウス帝期に生じたさまざまな「予兆」を扱っており、後半6-10節とは内容的にまったく異なる。
- 56) この「東の地域」がどこを指すかは定かではない。
- 57) Aurelius Victor, 15, 4.
- 58) Fronto, *Ad Antonin. Imp.* 2. 2.
- 59) Dio Cassius, 69, 15, 3.
- 60) D. Braund, *Rome and the Friendly King*, London, 1984, 24-25.
- 61) Dio Cassius, 62, 4, 1.
- 62) このようなファラスマネスの大きな譲歩には、この直前にアルメニアをめぐってローマがパルティアに強硬姿勢を示したことも影響を与えていたであろう。
- 63) D. Braund, *Georgian Antiquity*, Oxford, 1994, 234. また, Mitford, op. cit, 1202 は、領土増加についてはファラスマネスがピウスに敬意を表したからであると曖昧に説明するに留まる。
- 64) 前述。
- 65) Dio Cassius, 71, 2-3; HA, Marcus Antoninus, 8, 6.
- 66) このパルティア戦争は、新たに軍団を創設せず、既存の兵力で行われたものであった。また、ウェルス帝は戦争に積極的ではなく、トラヤヌス帝とは異なり遠征の指揮はほとんど取らず、シリアのアンティオキアに滞在し、実際の指揮は部下の将軍たちが行ったのであった(HA, Verus, 4 et 7)。ローマはトラヤヌス帝の時ほどの兵力動員をせずに勝利できたのである。
- 67) マルクス帝期のアルメニアに関する史料は大変乏しい。筆者と同様、アルメニアが親ローマであったと考えるものに、A. R. Birley, *Hadrian to the Antonines*, CAH, XI, 2nd ed., Cambridge, 2000, 172-173; Mitford, op. cit., 1204-1206.
- 68) Dio Cassius 72, 14, 2. このとき一時的に王位を奪ったらしいティリダテスは、マルティウス・ウェルスの手でブリタンニアへ追放された。ローマ領内のブリタンニアへ追放されたことは、アルメニアがよりローマ支配下に組み込まれるようになっていたことを示しているであろう。
- 69) ILS 9117.
- 70) CIL 3, 13627.

- 71) たとえば Campbell, op. cit., 220-236 は、初代アウグストゥス帝からフラウィウス朝期までを協調と外交の時代と捉える一方、トラヤヌス帝期以後を外交が崩壊し、軍事力による直接対決の時代と考え、この時代における外交の意義を軽視する。
- 72) Mattern, op. cit., 106-108; Campbell, op. cit., 217-218. しかも、本稿冒頭で指摘したように、パルティア戦争はトラヤヌス帝期すでに失敗に終わっていたのであり、ローマ人のパルティアへの苦手意識を克服できるほどのものではなかった。
- 73) たとえば、Whittaker, Frontiers, 310 は、「マルクス帝のパルティア戦争においては、トラヤヌス帝のように、メソポタミアを属州として直接統治することが可能であり望ましいと考えられた」とまで主張するにもかかわらず、属州創設が行われなかった理由を説明できていない。
- 74) セウエルス帝の新属州創設がそれまでの伝統とは相反していたことは、ディオ・カッシウスの記述からも分かる。ディオがセウエルス帝のメソポタミアでの新属州創設やトラヤヌス帝のパルティア戦争に批判的である一方、ハドリアヌス帝の東方政策を賞賛していることはよく指摘されている。Ex. Isaac, op. cit., 24-26. このディオのトラヤヌス、セウエルス批判とハドリアヌス賞賛は、ハドリアヌス帝からマルクス帝までの政策がセウエルス帝のそれと反していたからこそ、意味を持つのである。万一、マルクス帝がパルティア戦争実行においてセウエルスと同じ立場であったならば、ディオの批判は生きてこない。

《English Summary》

Roman Imperialism in the East from Hadrian
to Marcus Aurelius

Tadafumi KUWAYAMA

The Emperor Hadrian withdrew his army from the area beyond the Euphrates and stopped governing Armenia, Mesopotamia, and Assyria as Roman provinces. This may appear to have been against the policy of the former Emperor Trajan, who had originally created the provinces after the Parthian War. However, it is worth noting that Trajan himself had already converted some areas in the provinces into dependent kingdoms during his reign in order to allay the rebellious mood of the indigenous peoples. Hadrian succeeded and completed this process of changing the direct rule over them into an indirect one. Rome thus successfully retained its influence over most kingdoms beyond the Euphrates.

However, this caused conflict between Rome and Iberia, a kingdom in the centre of the Caucasus. During Hadrian's reign, Rome extended its power over Colchis and Armenia, east and south of Iberia. This prevented Iberia from expanding its territory, obliging it to cooperate with the Alani, who lived in the northern Caucasus. The situation of the northeast frontier was an unstable element in the Roman control of the area beyond the Euphrates.

When Antoninus Pius acceded to the throne, the situation changed. He summoned Pharasmanes, the king of Iberia, to Rome and forced him to acknowledge Roman sovereignty. Rome thus gained firm control of the Caucasus, the hinterland of Armenia, and the stabilization of its influence over the area from the Black Sea coast to Armenia led to the creation of Rome's great advantage over Parthia. This is why Marcus Aurelius was able to deal with the Parthian invasion and strike back easily, and why Septimius Severus was able to create provinces in Mesopotamia. The period from Hadrian to Antoninus Pius, in which the Roman Empire is generally believed to have been peaceful and defensive, must have been crucial for the establishment of the hegemony of Rome in the East.